

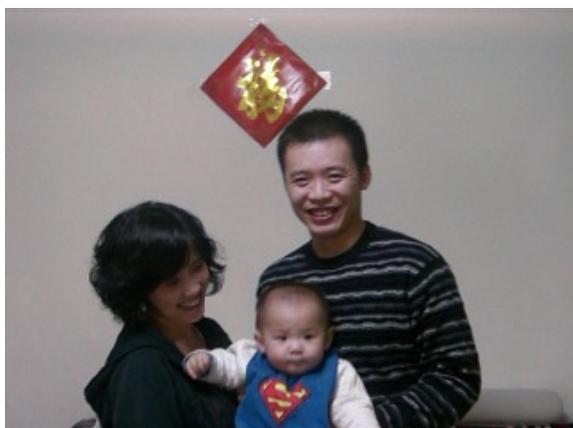
(メッセ海外通信 2010年1→3月号掲載記事)

～少子高齢化が進む中国～

下関市総合政策部国際課
(青島市派遣職員)
澤淵 史恵

年初の新聞で、80后(バーシーホウ。80年代生まれの意味。1979年に始まった一人っ子政策開始後に生まれた一人っ子達のことを指す。)についての記事が載っていました。ご承知のとおり、彼らは「小皇帝」と揶揄され、自主性がなく、利己的でわがままだと言われていますが、今回の記事では、80後の大学生がスリと格闘の末に刺されて死亡し、新年に行われた告別式には、彼の死を悼むと共に、彼の勇気ある行動を賞賛する人々が多く弔問に訪れたということが取り上げられていました。この他にも、記事の中には一昨年(2008年)の四川大地震の際にたくさんの80后が救援活動に携わったこと、北京オリンピックの際にたくさんの80后がボランティアとして参加したことが挙げられ、彼らを肯定的に評価する文章が書かれていました。

中国で一人っ子政策が始まって既に30年が過ぎました。当初は、中国の伝統的観念であった「多子多福(子供が多ければ幸せも多い)」、「不孝有三、無後為大(親不孝は三つあり、その中でも後継ぎのないことが一番親不孝である)」に反するものであり、また「黒孩子(戸籍のない子供)」、「産み分けによる男女比の不均衡」、「小皇帝」といった数々の問題を生み出すなど、大変反発の多いものでした。それがいつの間にか、中国の急速な経済発展に伴い、特に都市部における教育費・生活費の高騰、女性のキャリア志向等により実質的に受け入れざるを得ない状況となっています。昨今では、一人っ子同士が結婚した場合には2人までの生育を認めるという政策があるにも関わらず、実際にこの権利を享受している夫婦は少ないのだそうです。逆に、急激な少子高齢化の進行による社会的な影響を懸念して、上海では積極的に第2子の出産を奨励しています。



中国の一人っ子世帯の様子



保護者付添いの登下校の様子

山東省老齡委員会が昨年末に発表した報告によると、同省の老年（60歳以上）人口は約1,300万人と全国でトップとなっており、更に2020年には約2,200万人に達し、総人口に占める比率も2008年には14.2%だったものが2020年には22.33%となって、約4.5人に一人は老年者となるとの試算が示されました。日本の老年（65歳以上）人口が2007年に21.4%、2020年には29.2%と試算されていることを考えると、両国の老年の定義が異なるため単純に比較することはできませんが、中国が急激な少子高齢化問題と直面していることは理解できます。

こうした状況の中で、一人っ子政策の継続は中国の少子高齢化を更に加速させることでしょう。一方で、一人っ子政策を実施することは中国の人口抑制のためには必須であるとの政府見解もあります。13億人の人口を擁し、世界に住む人口の5人に1人が中国人であると言われる今日、中国の人口動態は、世界の人口問題・食料問題を考える上でも他人事では済まされない問題です。こうした状況の中で、中国の一人っ子政策は転換点に来ていると言えるのではないのでしょうか。